

昭和二十四年七月二十三日
第四十一号
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第二〇七号）

慈

光

第十八卷

第八号

目次

攝取不捨の意義……………	近角常観……………	(1)
よきひとのおおせ……………	近角真観……………	(9)
お浄土についての味わい……………	千葉崇憲……………	(14)
堂の鈴（遺稿）……………	佐藤強三郎……………	(18)
法味そのの折々……………	花田正夫……………	(20)

攝取不捨の意義

近角常觀

一、攝取不捨

『觀經』にある「光明あまねく十方世界を照らして、念仏の衆生を撰取して捨てず」の文は、信仰上重要である故、蓮如上人もたび／＼『御文』に引用しておいでになる。あまりに『御文』に出てくる故、眞宗信者は読み慣れてかえって、その意義が不徹底となり「攝取不捨は遠うから光明中に居ることだ」となった如きは、全くその意義を失ってしまったものである。

かくの如き撰取不捨も親鸞聖人になる時は極めて重大なこととなっており、聖人の眞宗としての著しいこととなつてある。まず『御文』にも出てくる聖人のお言葉には

「来迎は諸行往生にあり。眞実信心の行人は撰取不捨の故に正定聚に住す。正定聚に住するが故に必ず滅度にいたる。かるが故に臨終まつことなし、来迎たのむことなし云々」

これで見ると、未來必ず仏となるべき正定聚の人間と定ま

者灯抄一
抄出

あずけしめたまうなり。

これから始つてある程であつて、故に古來信仰上の甚だ大切な処となつてある。今日で云えば、徹底した一念が撰取不捨である。故に何人もがこれにいたらんことを望み、光明中に生活するようになりたいたいとねがうのである。けれどもそれが容易に得難い結果が秘事法門なることが起り、人為的のお授けで区劃をつけようとするにまでいたつたのである。そういうことの起つたも、全くこの攝取不捨を際立てようとしたからであると云つてよい。

二、撰取不捨の概念

そこでこの味わいを成るべく分りよい処で申すとなるに眞実ならぬ私に、何処までもその眞実ならぬをお見捨てなき、眞のおまことで向われる仏のお慈悲であるために、眞実ならぬ我々が、ついに仏のおまことに觀破され、敗けてしまつて……あだかも仏と我々と角力である如く（他力は仏と私との角力である）我々罪惡の大関の奴は何処までも取捨積りで抵抗して行くのであるも、それを何処までも咎めぬ極りなき仏の御眞実であるために、終に如何に眞実ならぬ我々も、その御眞実に敗けてしまつて「恐れ入りました」となつたが仏の眞実が徹した時である。而してその時は、眞実ならぬ我々が、それに眞実にし、お見限りなき御眞実の中に恐れ入り、抱擁されてしまふ、その味

り、必ず滅度にいたることを得るは撰取不捨の故である。

するとそのいよ／＼助かることに此世ながら決定する、その最も肝腎なところとなつてくる。又『御聞書』には

御たすけありたることのあるがたさよと念仏申すべく候や、又御たすけあろうざることのありがたさよと、念仏申すべく候やと申しあげそうらいしとき、仰せに、いずれもよし。ただし正定聚のかたは御たすけありたることよるこぶころ、滅度のさとりのかたは、御たすけあろうざることのありがたさよと申すころなり、云々。

極楽に往生して仏に成る方を基本としていう時は「御たすけあろうざること」である。けれどもこの世で助かつた心に覚えのある方より言えば「御たすけありたること」である。その心に覚えのあるところが撰取不捨となつて来る。又『歎異鈔』にも

弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて……念仏申さんと思ひ立つころのおおるとき、即ち撰取不捨の利益に

わいなのである。近頃ではよく世間でもこの語がそうした味わいに、撰取さるるという風に使つてある。こは学生諸君などは、余りよくなければ、我々の罪惡を数学的にマイナスの数と考へて見られるがよい。仏の慈悲はプラスの数である。マイナスが無限に加えられれば、マイナスは消されて、救われてしまふ訳である。概念だけはこれと分ると思ふのである。

処が修養ではここが然ういう風になられずに、仏を我々の行為の標準のようにとる。仏は清淨である、眞実であると見て、それに向つて此方もその如くして行く、ととるは仏を手本視し、標準視してゐるのである。得てさういふ風になり易いは無理ない。修養ではさういふ風に説いてゐるのだから。故にこれだと、向うに大きなプラスをこしらへ、それに到達しようとする程、こちらよりマイナス故、成り得ぬ／＼と苦しまねばならぬことになる。最後に標準の偉大を知れば知るほど、自己の不完全を苦しむだけに終つてしまふやうなことになるのである。こは必ず修養のみに限らず、信仰でも「喜ばねば」、「念仏称えねば」になると、矢張りお慈悲を標準視してゐることになることになるのである。

三、善導大師の至誠心釈

ところがこれに無理ない処があると思ふのは、善導大師

などの書き物でも、読みようによっては矢張りこれになつてあるところがある。それは御存知の如く『観経』に三心——一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心——この三心なることが説いてあつて、これに善導大師が釈をせられたものが、全体親鸞聖人が信仰を説かれたより処である。『信巻』などでも明にこの三心釈が根底となつてある。この『観経』の三心が『大経』に來れば、即ち第十八願の至心・信樂・欲生の三信である。即ち至心が至誠心、信樂が深心、欲生が廻向発願心である。……。

こは全体経文なるものは、新聞を読むが如く、誰が読んでも一応の意味はとれる。故にみんなが平素分つた積りで読んでゐるのであるが、ところが一つ本気に読むと、実に恐ろしい程になつてある。

私は何時も思う『大経』に四十八願、願々殆んど出任せと思ふ程に説いてあるのであるが、それが次の極樂を説いた所にくくと、一々みな願成就の文があつてみな生きてある。例えば無三惡趣の願があれば、後には「地獄・餓鬼・畜生の諸難の趣無し」の文があるという具合に、ほとんど差金を入れた如くになつてある。故に聖人は諸仏如來の眞説なり、と讃仰なされた。

今の『観経』の三心でも、それが『大経』に來れば、かくチャンと三信となつてあるという具合である。しかしこどうしても、これでは、仏の作された通り、我々も眞実にすると読める。仏を念ずる者が不眞実ではいかぬから、眞実心中にするのだ、と読める。また、

又眞実に二種あり。一には自利眞実、二には利他眞実なり。自利眞実というは、また二種あり。一には眞実心中に自他の諸惡、及び穢國等を制捨して、行住坐臥に一切菩薩の諸惡を制捨するに、我もまた是の如くせんと想ふ二には眞実心中に、自他凡聖等の善を勤修す。眞実心中に、口業に彼の阿彌陀仏及び依正二報を讃歎す（中略）不善の三業は必ず眞実心中に捨つべし。又もし善の三業を起さば、必ず眞実心中に作すべし。内外明闇をえらばず、みな眞実をもちいるが故に至誠心と名づく、己上。

どうしてもこれでは阿彌陀仏を向うに置いて、これを標準とし、我々これを礼拝し讃歎し、仏の作された如く眞実にする、と読めるが当然である。故に青年の方は宗教をこのように考へる。又信者の人もこのように取る。極言すれば法然門下三百八十余人はみなこのようにとつて居つたのであつた。処がこれがマイナスがプラスを標準として行こうとするのであるから、本気に遣らうとすれば、いよ／＼や

れは不思議がるのがおかしいのである、合うのが当りまゑである。それはこの瓶に合う蓋に出來てる経なのだから。処で今の『観経』の三心を善導大師が釈せられた、その釈文が、至誠心のところが、どうしても我々こちらが眞実にすることとしか一応のところでは読めぬのである。文をあげて見れば、

一には至誠心。至とは眞なり、誠とは実なり。一切衆生身口意業の所修の解行、必ず眞実心中に作すべきことを明さんと欲う。外に賢善精進の相を現して、内に虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋・邪偽・奸詐百端にして悪性やめ難し。事蛇蝎に同じ。三業を起すといえども、名づけ難毒の善と爲す。亦虚仮の行と名づく。眞実の業と名づけざるなり。若しこの如き安心起行を作す者は、たとえ身心を苦勵して、日夜十二時に、急に求め急に作して頭燃をはろうが如くするも、すべて難毒の善と名づく。この難毒の行を廻して彼の仏の淨土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり。

何をもつての故に、正しくかの阿彌陀仏の因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も三業の所修みなこれ眞実心中に作したまいしによつてなり。およそ施したまう所、趣求を爲す。

れないことを発見する外無いのである。私が苦しんだも、宗教とか、理想とかを入れて、これを行おうとしたから出來ぬに苦しんでしまったのである。

四、求道者の意中

ところが親鸞聖人からは……ここが聖人の違ふところ、著しいところである……この至誠心釈の読み方を常に云うごとく違えてしまつてゐるのである。これは違つた意味を見出したからではなくて、自身に恵みの徹底を實驗せられた味わいから、そうなつてきたのである。そこを何から申そうか……。

まず今の如く向うに仏を置いて、我々こちらから眞実にすることが出来るか、出來ぬか、そこを経験するでなければ他力は分らぬのである。まず普通には神仏を信ずるとか拝するとか云う時には、我々のこちらからそれに眞実にすると理解するが常識である。全体私は信仰の語を使つてゐる、それがよく分ると思つたからであるが、東京ではこの語を通俗語に、何でも拝むことに云うてゐる。眞宗には普通には信心という。『御一代聞書』などに信仰の語があることはあるも、まず一般には信心である、これは本當は信心の方がよい。私が用いた頃には青年には信仰の方が通りがよかつたからである。今日においては不適切である。矢張り信心がよい。ところがまたこの信心が、世間では「あ

の人は仲々の信心者じや」と、何か神仏を拜みたおしてもする如く思われてゐる。故に青年の方が信心が出来ませぬ出来ませぬと云わるのはもつともである。青年が理由なしにそんな信心が出来るものでない故に、ここは私の話でもよい加減の信心は出来ぬ方がよい。「イヤ結構だ」との「ばや呑み込みが一番困る。「信じられない」、「善く出来ない」、「有難く思えない」それでよい。

ところが、ここで言わなくてはならぬは、かく此方から眞実にし、信心するのでないと申しても、皆様の方では直ぐ「けれども」という思想を出される、この点である。

「此方からするので無ければ何うするのか、向うで何うかしてくれるのか？」とこれになりていかぬのである。先ず大抵の方が自分の思いでこしらえて信するのだとまでは思つていらぬようであるも、しかし分つたら然ういう風に思えそうなもの、そういうものの来るのが信心と、そういうように予想して居らるる。

殊に「求道」の文字で来られる方は、彼処に行けば何かあるから、それを得度いもの。青年の方ならば、信念が無くてはいかぬから、それを体得したいもの。さもなくも内面不純粹で可かぬから聞いて純粹になりたいもの。或はもつと實際的なのは、境遇上、又は病氣等で困るから、信仰

分つてゐる。余りにひどい」と。この腹立ちが起つて来た。

ところが、一方からは「これは聞きに来てゐる先生にこんな心を起す、これはいかぬ」と……これが揮ぬぬとこに出て来たのである。

ところが容易にここに気がつき難いのである。先ず大抵の人が出来ぬくと云いながら、矢張り自分で何とかしてやる積りでゐる。

譬へば、世間でも借金で困つて居る時に、一方が親切に引き受けよう／＼という。けれども此方が瘦せ腕ながら、何とか自分で始末しなくてはと、この腹がある限り、何程親切に言われてもチツとも響かぬ。

それと同様に、我々が此方から眞実にする腹がある限り仏のお慈悲は聞けぬのである。そこでこれが、我々の至誠心である。

これで本当に遣れるか、やればやる丈けやれないことを発見するばかり、然らばやれぬで頭が下げられるか？やれなければ猶もつてやらなくてはとなるばかりであつて、これで我々は転換のして見ようが無くなつて居るのである。

そこで肝腎は、かく我々、飽くまで自分が眞実で行く積りであるも、それが出来ぬことに突き当たる、ここである。私如きも自分の出来ぬことに行きついたのであつた。

を聞いたらこの心がすこしはらく、なるだらう、ニコニコ出来るようになるのだらう、と「なる／＼」で求道の花が咲いて居るのである。こう云うたが、最も適切に皆様の心状にあたるだらうと思ふ。

五、我々の至誠心

ところでかく「聞いてるうちに何とかなるのだらう、なるのだらう」でみんなが押して行くから何時までも、ならぬのである。そこに私が言いたいのは、

「それが何時までもならぬのである」という、一事である。すると皆様の方では「あ、言うて、なるようにするのたらう」何処までもこれを取られるから仕様が無い。後には私、腹立てて叱る。すると又「叱つて下されて有難い」と

これが皆何時の間にか自分の思いで拜んでしまつて居るからこれになる、故に私は然ういうのに対しては飽くまでもひどく言う。すると仕舞いには腹立てる人がある。

何時かも、大分県の方が聞きに来て「お慈悲のことはよく分つて居るのだけれど、何うもあとが善く出来ぬで困る」と。余りにそれを云われるから、私「あなたは御慈悲のことが分つて居やせぬ」という。「一念の徹底が無くて、あとのことが出来ぬわけだ」と、やつてしまった。

すると其人「如何にもひどいことをいう。自分だとして、学校出てから十余年、宗教のことに就事し、信心のことは

ところが、これを言うと、青年の方は

「しからは我々はまだ出来る気があるから、やれるだけやつて苦しんだらそれになれよう」と、こう思われる人が多いのである。出来ないことが分つたとて、出来なければなおもつてでかきなくてはと考える人間である。故に、そこは、自分の思いよりも、事実出来ていぬことに着目しなくてはならぬ。

六、岩本氏等の例

そこで彼の大阪の岩本氏は、市に百万円の公会堂を寄附し、その外色々の事に尽くされたのであるが、一朝自分の商売上の事に蹉跌し、その時は以前立派にやつて居つただけ、殊にそれが人の目に立つた仕事であつただけ、今の不義理がなおもつて悲しい。ついに何とも相済まぬと自殺して果てられたのであつた。この事は、今日一面からはたしかに感心な出来事であると言つてよい。現に一方では実業界の乃木將軍であるとの説すらある。

ところで今云うのは例としてである。同時に一面をういう場合を通る話をするの故、それは金に限らず、我々が義理上、責任が立つか立たぬかとなつた時には、借金を持つたも同じなのだから、そこで今この時に、この苦境を見てくれた友人ありて

「それを自分が引受けよう、心配するな」

かりにそう言うてくれたとしても、岩本氏如き真面目な人は、

「それは友人は出しても呉れましょう。けれども自分のことで友人に迷惑を及ぼしては相済みぬ。自分のことは何処までも自分で始末しなくてはならぬ」

と。これが岩本氏の苦しまれた心持であつたらうと思つのである。

成る程「自分のことは自分でしなくてはならぬ」言や勇壯で真面目である。けれどもこの心である限り、折角親切に考えた友人も、これでは取りつけぬ。折角の同情もこれでは水泡におわつて、何時までも話がきまらぬではないかと申すのである。

そこで、その岩本氏の心に句切りをつけさすためには、友人の方は斯う言わなくてはならぬ

「君、自分でしますよ、一体どうするのですか」

「いや別に考えは立たぬも、しかし自分のことだから自分でせなければならぬでないか」

「イヤそれは分っているも、けれども、せなければならぬと、出来るとは君違うでないか」と……。

話しながら思い出す。近頃は普選の神様、尾崎、犬養の諸氏が、まだ福沢先生の門下に居られた時分、歳末になつ

そこで今の「やらなくてはならぬと、やれるとは別である。やらなくてはならぬがやれぬのが気の毒故、それを引き受けよう」……これをさきの大分県の人の場合でいうと一方に腹立て反抗して居て、一方に「イヤ聞きに来て居る先生にこれではいかぬ」これが行きも、戻りもならなくなつたところである。

処が「それは可かぬ」と私は言うのでなかった。「イヤそれが自分にも経験がある。それを悪くは思わぬ」と。これを言われると、如何にも意外である。

故に、有難くなつて信仰に入るのではない、此方はいかぬことをしているに（自分でやれぬはいかぬことである）案外にも「それは悪しくは思わぬ」と。これが分ると、これは有難いと、これが信仰に入つたのである。

処がみんなが水族館の金魚で、ガラス戸に突きあたり、行くことが出来ぬのに行ける／＼と思つて居るのである。故にそれを行くと突きあたつて死んでしまふ。みんなが、人生とて、信仰とて、行けぬところを行こう／＼として居るのである。

然るに、その行けぬところを見て下されたから、大悲の救いがあらわれた。その救いは、みんなが行ける／＼と双向うのに呆れず、あらわれて下された真実であるから、

「お前、俺に有難いと一言いえ、救うてやろう」と、そ

て喰う物無しに、しきりに天下国家を談じて居た。福沢先生がそれを見て「それもよいけれど、一つ自分のことも考えたらどうか?」。「いや先生、自分の事や妻子のことは一家の私事です。我々は石を噛み砂を喰つてもやります」すると、福沢先生が「これは怪しからぬ、石が喰えますか、砂が喰えますか、一つ喰つて見せて貰いましょう」、これには流石の人達も困つたという話がある。

同様に「君、やりますよ、大方この上君のすることは自殺するのだから、やりたまえ。併し、君死ぬと、チツとは君の責任がすまされるのですか」と。

或人これを聞いて、死をもつても自分の責任を果たされぬということに気がついて、仏の眞実を喜ばれたことがあつた。即ち「死をもつても君が何うしようもない、そこを気の毒と見たから自分が引受けよう」という先方の友情である。

これを聞かされてもなお「自分がやります」が言えるかどうかというのである。なお今の尾崎氏等の話は、これで大いに困り、家に帰つて見たら、福沢先生の方から、既に年末の払いが送つて来てあつたということである。この送られる眞実があつて、よい話だと思つたのである。これは実話だそうである。

んなことは一言もない。然るにみんなが「有難くなつてこそ」、「何うかなつてこそ」と、矢張り何処までも自分がどうかなれて行く腹で居るのである。（未完）

福間氏へ最後の御見舞

福間氏が極の第八回目の手術を前に信仰の話を求められた時、近角先生が馳せつけられて

「唯もう広大なる仏の光明中に撰取せられて居る事故、何事も仏の恵に安んじてやられたらよろしかろう。人生は外の事はない。結局、南無阿彌陀仏の一つである。それについて親鸞聖人のお歌にも

恋しくば南無阿彌陀仏を称うべし

我も六字のうちにこそ住め

とある。聖人一代の御教化も、この広大の御恵み南無阿彌陀仏の外はないのである。又蓮如上人の御歌にも

形見には六字の御名をのこしおく

なからんのちは誰も用いよ

とある。蓮如上人一代の御教化も矢張り南無阿彌陀仏の一つである。他方信仰の味はただこれだけである。何事が起ろうともこの御恵み一つを喜んで行かれたらよろしかろう」とねんごろに話されました。

近 角 真 観

経済学部新館竣工記念特集を手にして、大内先生の「地方財政」鈴木先生の「手形法」の御講義、舞出ゼミを共にした、鴻一郎教授の、たしか「レカード地代説明」等々：若い血の燃えていた銀杏並木の本郷に久方ぶりで思いを馳せていたら、その「経友」次号に「何か書け」との御命令である。

綺羅星の如く輝く「ふるきひと」「いまのひと」……：あまた数々ある中に、今更何を私如きにとはいはしたが、アソウダ「常観の息子がドウシテ経済をやって炭礦で大汗かいているのか？それが知り度いんだな……」と思ひ当ったそれなら書ける。

※

その独断を前提にして、臆面も無く「常観」を語り「真観」を語らして頂こう。

一高時代サッカー部に籍を置いて専らグラウンドを駆けまわっていたので、文乙に居ながらドイツ語の曲げ方もウ

んだ」のも無理はない。

※

昭和七年は幸いにも「わが舞出先生」が原論を担当しておられた。三年の「学説史」が楽しみで、身の程もワキマエズ、二年の時「ゼミ」に加えて頂いて、テーマは「レントの学説史」であったが、その中で臆面も無く「ロートベルトス」を頂戴した。既刊の日本文献により一応「レカード」と「マルクス」の間にいる彼の位置、特に所謂「絶対地代」提唱の先駆をなしたと云われている「彼の学説」の紹介位は承知の上でとっかかったのではあるが、彼の原典を、今は懐かしき旧学部図書館で採れば探るほど、壮大な世界観の一環として展開されている「原典の学説」と既に読んだ「日本語の紹介」とが結び付かなくなってしまう今から考えると「完全ノイローゼ」である。

そのうちゼミのリーダー格であった三年生鴻一郎先輩の透徹明晰の「演述」がはじまる。次は僕の出番。益々フルエが来た。

そして遂にはそぼそと「彼の伝記」を読み上げただけで絶句してしまったのである。

先生は「困りましたねー」と当惑されつつも、「昨日探したらボクが大学院時代にやった彼の研究が出て来たからそれを朗読しよう」と助けて下さり、音吐朗々と読み聞か

口覚えのまま見事「法学部」を振られ、かくてはならじと上智大学で一年間ミッチリ修行、サテ哲学でもやろうか……：と思っていたら

「オットサンが哲学では救われず、信仰で救われたと云うのに何たるコトジヤ、経済をやれ……」と叱られた。まさか「東大経済」は許すまいと「自粛」していたこととて「待つてました」とばかり合意成立。

「ワシは西洋で（明治三十三年から三年間ベルリンを中心にしてヨーロッパ宗教事情取調のため東本願寺より留学社会主義運動を見聞している）南無阿弥陀仏が有難くなつてから、専ら経文の究尽に明け暮れて、それからは一向経済や、社会の書物を読まなんだので、いま中央公論や改造を読んでもサッパリ判らん。だが信仰の途と同じく、経済でも正しい途は一つしかない筈じや。それを探れ」

と云うのである。当時は「福本イズム」をめぐる論判が華やかだった時代であるから「常観」が「サッパリ判らな

せて下さった、難解の深奥を消化玩味し尽した後、地代に関する学説内容を要約展開せられ、その学説史上の価値を論じて流麗あます処無い。私は冷汗をかきながら、名ピヤニストの演奏を聞く思いに打たれていたのであり、ゼミの仲間が「私のお蔭」で、その滋味を満喫し得たのである。

※

あわよくば「学部に残って……」の最初の思いはどこへやら、「君、勉強したんじやないか。何か書いて出せよ。単位はやるから……」との御親切もふりきって高文の勉強もやめ、「所詮学問には向かん」と二年の試験も振って悩んだ姿は、我身ながらも「いじらしき真観」であった。

ただ今も忘れないのは、「ゼミ」である人が「先生はマルキシズムをどう批判されますか」と質問したのに対し、先生は当惑の面もちながらもポツンと、「彼は利害対立に生きる人間の憎み相闘う面を見て、赦し相和する他面を見ていない」と云われたことである。

行く手は「実社会」と思ひ定め、三年には大に励んで十九単位を受けて（受けぬと「就職」はきまっていたが「卒業」が出来ぬ。必死である）十六「優」。今も私の自慢である。

舞出先生の「原論」も「学説史」も勿論「優」であった。後年学習院で甥っ子が御厄介になった時、「近角が伯父さんか？彼はボクの教え子だ」と云われた由。グッと来た。さ

きに引用したお言葉と共に、私にとっては有難い「よきひとのおほせ」である。

歎異抄は親鸞聖人の晩年の弟子である鴻才碩徳のほまれ高い常陸国河和田の唯円坊が、聖人の孫である奥州東山在住の如信上人と共に、聖人御在世のむかし「おなじころざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を当来の報土にかけ」た「ともがら」を率いて京都に上り「故親鸞」からじきじきに真実の信仰を聞いたのであるが、先師如信上人の没後「そのひとびと」の弟子共の中に真実の信仰にあらざる異義を生じたことを歎いて「露命わずかに枯草の身にかかる」晩年、「一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなく筆をそめて」書いた信仰の書物である。

前段（一条乃至九条）に親鸞聖人の「御物語」を掲げ、それを「証文」として後段（十一条乃至十八条）に於て異義の条々をあますところなく論判して（この場合十一条の「異義」を打つ「証文」が一条の「御物語」となっている以下同然）「他力真実のむね」を明らかにし、「故聖人」に対する渴仰の思いを尽している。

父常観の一生は「学生諸君」と「寢食を共にして」この信仰書を熟読味読、体読したものとして頂けば有難い。

ったんジャから、炭鉱に飛び込んでその解決に当たったら如何ジャ

まことにウンもスーも無い。私が炭鉱労使の間に身を横たえて今日に至った直接の動機は、この「よきひとのおほせ」であり、春秋の筆法をもってすれば、その遠因は「よき師」舞出先生と、「よき友」鴻一郎教授が作って下さったのである。

父は晩年、句仏上人僧籍削除問題を信仰問題、思想問題として取上げ、東本願寺当局者に対して激しく「ベト」を唱え、「信界建現」を発刊して強くその是正を迫り、全国に遊説して自らも僧籍を削除され、私の大学浪人中、脳溢血に倒れながらもなおひるまず、悪戦苦闘の結果遂に所信を貫徹した。その信念に殉ずる強盛熾烈な勢いは、他に類を見ない。病中五・一五事件あり、周囲は「再発」を恐れてこれを秘したが、たまたま七月に至ってこれを知り痛憤左の長詩を賦した。

七月八日晝、哭犬養首相

その中に

何事天下皆閉唇 吞声洩黙既五旬

公道赫々果与因 請看応報回如輪

とある。次いで昭和十三年十月、前年「新婚の夢未だ醒

その二条に

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまらすべしとよきひと（この場合法然上人）のおほせをかうぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」とある。この親鸞を「常観」と読みかえ、よきひとを（この場合親鸞聖人）とすれば、それが父の信仰の内容となる。詳しくは歎異抄の原典によられ度い。

行く手は「実社会」と思い定めた頃、父は「どうだ、炭鉱に行かんか？」と云った。

当時は各地に労働争議、小作争議が激発し、特に多年の伝道で親しんで来た長野県に於て、地主は青田刈を強行し小作人はガラス片を田にたたき込んでこれに対抗する段階にまで「悪化」したことは、父に相当なショックを与えたりしい。これを「人生問題」、「思想問題」と受けとめつつも父は、

「これからは労資問題（今日の労使と云う観念は当時はまだ無かった）が一番むずかしい。

オットサンも嘗て貝島さんに頼まれて大の浦変災の御導師を勤めたことがあったが、こうした処で働くのは定めよくよくのこと。労資問題も並大抵ではあるまい。だけど正しい在り方は一つしかない筈じゃ。お前も折角経済をや

めやらぬ間」に出征した最愛の長男、わが兄文常中尉（成蹊でラグビーをやや、東大東洋史卒後東洋文庫に奉職）を念仏道場にゆかりのある盧山に失い

一道院釈文常国士を哭す

の一文を草して筆を折った。曰く

「唯円坊、念仏成仏是真宗の正義を顕彰せんが為に、歎異抄一篇を草し、泣く泣く筆を擱いたのである。私も数年「信界建現」を発刊して久しく有縁の方々とは信契を結びしが、恰も「歎異抄愚註」の終結と共に泣く泣く筆を擱いて茲に「信界建現」を廃刊します」とし

歎異一篇伝後昆 思想險惡何足論

の思いをなし、只管「念仏の行者」として「時世」に耐えつつ悲しい晩年を終った。

私は満州出征中母の手紙により、父が大東亜戦争勃発直前の十二月三日に死んだと知らされた。恐らく宣戦から敗戦に至るまでの推移を見抜いていたものであろう。遺言は「常首！（父の異母弟、「常観」を嗣いだ）お前は思想問題を如何する気ジャ」

の一言であった。

爾来、嚴父常観の「愚註」は、愚息「真観」活躍の基盤

となつてゐる。

※

私の就職がきまつたとき、慈母キソ刀自は「経友」の同窓で且つ同時に三菱鉱業に進んだ親友白川義正君（人も知る白川大将の御長男、私の出征中にかわって妻「春子」と見合して貰い、あまつさえ仲人までして頂いた）に対し、「真観みたいな暴れ者が三菱の店員になれるでしょうか」と心配したそうであるが、浅からざる御因縁により、私はいま役員末席を汚し、子会社「美唄炭礦」の社長を仰せ付かっている。

私の思いは「三菱鉱業」と「美唄炭礦」の両社が私を必要としなくなった時は、「速かに」本郷の求道会館、求道学会に帰って、木村雄吉師（妹のマン。昨年伝研教授停年退職、木村謹治先生の実弟）と共に、次代の日本を担う、「学生諸君」と「寝食を共にして」歎異抄を読み、多年体読した常観師の「愚註」を出版して「後昆に伝える」にある。

そして「娑婆の縁つきで、ちからなくしておは」った後は「文常」「常観」「キノ」「常音」が一緒に眠っている滋賀県東浅井郡湖北町なる祖父「常随」の墓に入って、ゆっくり「休ませて頂く」心算であるが、今は一万の従業員家族をこの「美唄炭礦」で「喰える様に」することが、私の努めである。サキのことは思わず、私の本領に即し、経済学部の「師友」から学んだ

野党的精神（權威に屈せぬ心）
実証的精神（事実を重んずる心）
理論的精神（言説を正しうする心）

を武器として、今日も「会社」が「生き抜く」ための切羽整備に立向かおう。
こんな気持ちでいる私である。

昨年六月の「三菱からの分離」で「共苦勞」した、わが美唄炭礦労働組合の親愛なる執行委員長、大沼輝光君は言う。

そこに山並みがある。そこに炭がある。そこに人がいる。ただそれだけで炭礦があるのか？
創造と、英知と、努力と、そしてひたむきな真心があつてこそ、そこに炭礦があるのだ、と。

社長たるもの豈奮起せざるべけんや。

（東京大学経友会発行「経友」三九号所載）



お浄土についての味わい

久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、
いまだ生れざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと
まことによく／＼煩惱の興盛にそうろうにこそ、名残り
惜しくおもえども娑婆の縁つきでちからなくしておわる
とき、かの土へはまいるべきなり。 八歎異抄九章V

五月十八日は、酒見老師の祥月御命日である。先師の冥冥のおはからいによるのであろうか、今日はお浄土について味わいを賜った次第である。その御化導をいただいたは昭和二十一年八月から二十六年五月十八日の御往生にいたるまで、とくに二十五年五月までは月々かがさず御来講をいただき昼、夜、朝とごねんごろに慈育を垂れてくださったのである。先師におあいできたということは、精神的にも身体的にも行き詰っていた私に対する如来の御はからいというよりほかになかったのである。

一度念仏に眼を開かしめられてみると、釈尊の靈鷲山の

千 葉 崇 憲

会座もはなはだ遠からぬ心地がするのである。「あら心得やすの安心や、あらいきやすの浄土や」とも「易往無人」とも味わわれてきました。しかしながら

本願門一乗は、逆悪撰すと信知して

煩惱菩提無二と すみやかにとくさとらしむ

わが煩惱をはなれたまわぬ如来のおまことがありがたく
煩惱即菩提、生死即涅槃というも

無碍光の利益より 威徳広大の信を得て
かならず煩惱の水とけ すなわち菩提の水となる

と現世の生活を解決し、どうにもならぬ私にそうて下さるお念仏をよるこんで……お浄土ということをやろこはず恋しがらず、二十年を過して来ました。

先師の還帰されたのちは、かよう申しては恐れいるけれども、御命日には御和讃の源空章を誦して家族だけで偲びまつってまいりました。昭和三十八年夏母を、冬次男を葬い、家内寂寥、看病の手段も必要とせぬままに、かって先

師有縁の人々にもお参りをねがって御命日に御法話をさせて頂くことになった。いつしか「求道会」と名づけたのも先師から承わった近角先生につらなる御縁によるところであり、今夜は数えて二十五回にあたるのである。

他力の信心というものは不思議なものである、先師から承った御法話は一生つかうても尽きず、今にいたっても必要に応じて、こんこんとご回向を賜るのである。

かって先師に、浄土がありがたからず、恋しからぬことをお伺いしたところ、近角先生もそうであられたが、お父様の御往生にあわれて浄土がなければならぬと体験されたということ、また自分もなぐたつてから、阿弥陀経を旅の車中で拜読してはじめてお浄土を体感したとお話くださったことがある。それをうかがってから今にいたるまで、まだまだ自分にはお浄土を体感出来ぬまま来ていたのであるが、今月ようやくほのかにお浄土について感じさせて頂いたので、これを述べて見たいと思う。

蓮本千秋先生が三十六、七の若さで亡くなられた。お会いしたのはたった二度である。お父さん、お祖父さんともに僧侶で存じあげていたが、数年前と昨年と引続いて御往生され、先生は中学の体育の先生を勤められながら僧職の方もできる限り勤めると元気に語って居られたのが昨年の

そのように念仏の上においてはハツキリしておりながら死なれてみると愚痴の想いが綿々ときかないのであります。あるいは白血症類似症であったのではあるまいか、ちがった病院へ入れたらよかったですかかのであるまいか……さらにこの子の生れて以来のことまでさかのぼって悔やまれるのであります。「つくるもつくらざるも皆罪体、思うも思わざるもことごとく妄念なり」のお言葉が胸にこたえます。その時二首歌が出来ました。

いましばし父の非情を許せかし通知簿を終りてひたすらなむ

諸行無常是生滅法いみじけれど愚痴のなみだはかわくひまなし

煩惱即菩提、生死即涅槃と平常の時は味わいながら、いざとなるとどうにもこうにもならぬ、このどうにもならぬものがいきつくところ、全くすくわれるところは安養の浄土よりありえないのである。ここを仏かねてしらしめしめしてお待ちかねなのである。

思えばわずかの……とはいえつかうて尽きることはない……おこづかいに有頂天になって肝心の大財産を忘れ、利子だけに満足して大元金に気づかないようなものであったのである。ただここで、そのおこづかいや利子を頂いているということは大切なことであって、そうでなければ、大元

五月であったのに、また八月には二度目にお会いでき、何となく懐しがつてくださったのであったが、その後病気がみつかり御入院の時はお手おくれであったとのこと、これを聞いたのは今年三月末であった。おどろいて求道会のプリントをまとめてお送りしたのであったが、はや四月三十日はお葬式であったという、まことに人生の無常を痛感させられるのである。私のこうして生きているのが不思議なくらいである。生きているから煩惱即菩提とよろこんでいるのである。ご承知のごとく、私の二男も急性白血症と宣告され、方に一つも治る病であつたらいかによからうと嘆かれたのである。もしも診断がいであつたらうとなによからうと思いましたが、医薬も、親の辛苦も、子供のいたいたしい努力もすべて空しかったのである。しかし十五で死ぬ子には十五の一生があつたようである。病院が善通寺にあり、毎日お大師さまの前を通り、お参りはするけれども、別におねがいをしように思わなかつたのは不思議である。子供の腕に先師から賜わつたお珠数を通させて、「治るときには一番はやく治して下さい、死んではお浄土へ導いて下さるこの上もないものがお念仏であるから」と申し聞かせました。畢竟するところ八如来さまのよいようにして下さいようにおまかせするより外に道がないVと思い定めておつたのであります。

金も大財産もいただけぬのである。入正定聚とはこのことであり、往生は平生に決すとはこのことである。苦惱の旧里はすてがたく安養の浄土は恋しからずとも、娑婆の縁つきて力なくして終るとき、彼の土へ参らせて下さるのである。念仏の上においてはこの世とあの世との区別はないけれども、わが肉身の上には区別しないわけにいかぬものがあるのである。唯心の弥陀、己心の浄土などということはここのとこを間違っているのではなからうか。わが煩惱を離れたまわぬお念仏は自然にしてお浄土へ往かしめて下さることであらう。

ここで近角先生が『慈光』第四月号に「応現と寂静」と題してのべられておられるお味わいをいたたくのであるが、先生がお父さまの御往生にお浄土へのうしろ姿を拝され、お子さまの御往生には、子とともに片身をふみ入れた心地がしたと、仰せられたることなど、すべて『慈光』の読者の方はすでにおよるこびと思うので省略して、かわりに、わが信友で、ともに酒見老師からお育てを受けた久利明忍先生のことを申しあげようと思う。

先生は求道心実に強く、信学ともに篤い方であった。坂東御真筆本写真版の御本典を常に拜持して離さぬという方であつて、不勉強きわまる私は二人三脚のように形影ともない、たよりにしてまいった方である。しかるにこの方も

一年前お父さまの御往生を見送られたのち四十年三月二十
六日夜ご発病、翌二十七日御往生なされたのである。病名
は蜘蛛膜下出血、御年四十五であった。先生は三十九年秋
の御彼岸にはじめてお父さまの夢を見られたのである。ま
ことに神ミコ、こうしいお姿でお父さまが御出ましになった。息
子ながら頭が上がらぬようであったという。そのとき
「如何にして浄土往生するや」と問われたところ「念仏
してこそ」とお答えくださったと思つたと思つた、と語
してくださった。今にして思つとお父さまは子どもの死を
予知されて、お浄土からお導きにお出ましになったよう
でありがたいのである。先生は学問すぎ、理論すぎの自分の
ために「往生浄土の道は念仏してこそ」とのお諭しである
と何回も喜んでおられたのである。その久利先生と生前最
後のお別れを申したことになったのは四十年春の彼岸、宮
脇さま方の自照会の席であった。私は独り残されてすで
一年余を生かしてしまつてゐる。そして近角先生、酒見先生
さらに久利先生がひとしくご回向くださつて、今月はお浄
土を感じさせていただいたことである。
よくならうと思つてもよくなれぬのが闇である。名残り
おしくとも縁がつきたら逝かねばならぬのが娑婆しあば即ち忍土
である。どうにもならぬもののために
「汝一心正念にして直ちに來れ、吾能く汝を護らん」

堂の鈴 (遺稿)

慰問 (三)

お小夜はその夜色々のことを思った。
八私は恋のために狂つてお藤を亡きものにしようとした
心から人を恨んだが自分はすこしも幸福にならなかつた。
その罪の報いで刑務所へ入れられた。それから恨むこと
を止めようと苦心したが、どうしても止められない。
こんな悪人には誰も呆れてしまふにきまつてゐる。自分
が悪いからよくなるうと努力しても、よくなれなかつた。
人に知れると皆が呆れて逃げてしまふと思つたから人にも打
明けられない。独り淋しく困つて失望するのみである。
それなのに、思いがけなくも、こんなひどい根性である
ことを知つて、それを憐れんで、どこまでも呆れないとは
本当に不思議なことである。不思議だ、不思議だ、
……
……
信哉は相変らず、時々お小夜を訪ねた。そして或は書物
を、或は名画を持って慰問した。刑務所では時折り即売会

と呼んで下さるのである。池山先生は「オネガイダカラ、
スグキテオクレヨ」とよろこばれたという。
証知生死即涅槃とは、どうにもならぬ惑染わくせんの凡夫が浄土
往生しておさとりを得させていたたく身と定まることであ
る。酒見老師は、回向返照えこうへんしやうをほのかに感じ、かすかに輝く
という風に仰せられた。庄松同行は「極楽の隣座敷に寝て
いる」とよろこんでいたという。極楽は遠いところではな
い、行き難いところでもない、平生いたたくお念仏に末と
おつてゐるのである。正定聚とはこの隣座敷の住人のこと
である。隣りからさし入る明りの中の住居である。苦惱の
中にいて苦惱を超えさせてくださる道がついてゐる。

朝顔 暮鳥

あさがおは
口を漱いでみる花だ
まずしく びもじく
おなじく
一りんの朝顔に
かすかな呼吸のような風……
しみじみと
静かに生きようとおもう

佐藤 強三郎

を開いた。お小夜の作品が出ていたので、いつも見に行つ
た。残りの品があれば、買って来ては楽しんだ。
満三年目にお小夜はとどこおりなく出所した。その時、
信哉は、白足袋に、フェルト草履の上等を贈つて迎えに行
き、お小夜の好きな直江津の鯛寿司は忘れなかつた。
お小夜は直江津の家に無事に帰つた。
その年の夏、一郎はお藤と直江津へ海水浴に行つた。海
辺を散歩すれば昔と変りがない。磯辺には昔のものと同じ
ものだらう、同じ型の漁船が、陸へ引きあげてある。あの
時の一本松もそのままである。お藤はひと目見るなり、松
も、船も眼にシミる。
お藤は思う入佐渡の景色も、松も船もチツとも変わつて
いない。世の中は変わるといふのに、直江津の景色はこうま
で変わらぬのか。……変わったのは私の心ばかり。あの五
智の浜は自分が苦悶して入水した所でないか。……ああ、
お藤「信哉さんも明後日うちへ來られるそりですから、お

小夜さんを誘ってまた、直江津へ海水浴にきたらどうでしょう」

一郎「それもよからう、そうしなさい」

その日、お藤は信哉さんのお供をして五智の浜へ来た。

そしてかねて打合せてある一本松の所で待っていた。

お藤は新聞紙を砂の上に敷き、お寿司、水菓子、水筒を出してお小夜を待っている。

やがて姿が見えてきた。お藤は立ちあがり、手を振って「ここです、ここです、早くおいで、と合図した。」

お小夜の方では、よろこんで、子供のように手を振り、身体をのぼして、頭をユクン、ユクンとさげた。

お互に近づくと、お藤は敷いた新聞の座席から、裸足で飛び出していった。二人は会々と、頭をユクンとさげ、手をとり合って、堅い堅い握手をした。

お小夜は紙包みの中から、アイスクリームを出して

小夜「どうぞ、とけないうちに早くお上り下さい。」

好いお天気で、波も静かですわね……」

三人はお小夜が持ってきたアイスクリームを喜んで食べている。その前方を北海道行きらしい大きな船が通る。

子供が、夫婦連れが、犬なども後から後からと傍を行く。風がないので砂の飛ばぬ心配もなく、三人がゆっくり食べて

鈴は互にブツかれば音がする、そしてつぶれる。然し大願業力の丈夫な綱にしっかりとつながれていれば、いくらゆれても、鳴っても、落ちる心配がないから、自然に静かになる。

信は願より成ずれば、念仏成仏自然なり

自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわす

何事も本願より生ずることである。

……

お小夜はその後、樂焼を造り、これを売って生活した。

茶碗、花瓶、置物、などは仲々よく売れた。

法味その折々

愛語よく回天の力あり

皆様方の御記憶にも深いと思いますが、長島愛生園で亡くなられた、明石海人さんの詩に

『願』

十年前 隣人が

いる。

老人の飴屋がカン、カンと例の鉦をたたいて人々の間を縫って行く。そのうしろを子供が大勢ついて行き、飴をしやぶっている。

三人は、果物を喰べ、お茶のみ、寿司をたべ、十分に満腹したが、あまり話が出ない。

やがて、

お藤「今日は、よくお出で下さって、本当に嬉しい」と云って涙をポロポロと流して下を向いた。

お小夜は、その一言を聞くや、電気にふれたように、身体中ビリビリした。

小夜「ハイ。本当に嬉しい。ありがと……」

と、やっと云った。

波はかすかに、ザアザア……と。

信哉「今日は本当によかった。有り難いことです」

と愉快そうである。

お小夜は八お藤が私を慰問してくれたのは、あれは本当であった。本当だ……本当だ……と心に叫んだ。

堂の鈴

悪人をどこどこまでもお見捨てない仏の本願真実を信棄させられたから、又人の真実をも信ずることが出来たのである。

数年ののち、お小夜は、世の中の酸いも甘いもかみわけた大胆で元氣者の土木請負師の後妻になった。これを見て、「あれは破れ鍋に綴蓋だよ」と批評した者もあった。それをお小夜はニコニコして聞いていた。

何年か経ったあとで、主人は長患いのち死んだが、お小夜は、よく看病したとの噂である。

絲瓜咲く屋根に経読む美妓の果

と詠んだ人もあったが、これはお小夜の晩年の事らしい。(終り)

花田正夫

私の生存を憎んだ。

五年前、はらからが！

残るは、ただ一人の母親だが

涙ながらに、生きて居よという！

というのがある。海人さんは長い自宅療養の末、明石の療養所で加療中、病気が悪化して失明。それまでは幼い時から好きであった絵画を描くことに唯一の喜びを持っていたのに、その道が断たれてから、絶望のあまり狂人のようになつて、度々自殺をはかっていた時、お母さんの血の涙の声がとどいた。

それからはお母さんの慈愛の涙、切なる願いに支えられて一縷の光明が点せられ、ほどなく明石の療養所が閉鎖されたので長島の愛生園に移った。そこに眼は見えなくても耳が聞える、大空に小鳥の囀りが、海浜に浪の音と磯の香りがする。そこに詩や俳句の世界を見出して、最後の日まで、一日一日が惜しい／＼と云いながら精進を続けて亡くなられた方でありませう。

この詩は、その煩悶のどん底に生れたものとして、誰しも一度読むと忘れられないものであります。海人さんは本当によいお母さんをお持ちだったと思います。

「愛語よく回天の力あり」とは道元禪師の金言で、良寛和尚が坐右の銘として生涯渴仰して居られました。

海人さんが絶望の底にあって、お母さんの涙ながらに「生きて居よ」の一句に、愛語を聞きとられ、そこに聞い海人さんの心に回天の力が現れました。

鳴く音をもらす、ほととぎす。

と詩人はうたいましたが、歎異抄の名所で、時鳥ならぬ如来の愛語を聞かせていただきましたよう。

(昭和四〇年 七月十日)

今一人のわたし

ヘレンケラー女史のことはどなたも御存じでしょう。幼い時大病がもとで、視力も聴力も失い、従つて物も云えなくなりしました。この永遠の闇、音のない孤独の女史に生涯を捧げて導いたのが家庭教師のサリバン女史でありました。サリバン女史も薄幸な人でした。船乗りの父は行方不明、母は病弱で早く死別し、精薄の弟と孤児院に収容せられました。弟も早く亡くなり、自分も眼病で失明寸前という有様でした。

この時、この少女の容姿が英国の王女によく似ているということから、或特志の婦人に拾われ、よい治療をうけて幸に失明からまぬかれました。

こうしたサリバン女史が三重の不幸を持つ幼いヘレン・ケラーの補導を進んで引き受けました。その日から父母から離れて二人だけの生活が続けられ、あらゆる苦難の末、ケラーの心も従順になり、遂に大学まで卒業出来て、世界の身体障害者ことに盲啞者へ大きな慰安と希望の光を掲げ

さて私にはもう父も亡く、母も逝きましたが、幸にも、『歎異抄』の中に、愛語を聞かせて頂いております。

私をはじめ「愛の宗教」を聞きましたが、敵を愛し、隣人を愛しどころか、生みの親をさえ「火鉢あつかい」しか出来ない、利己一点張りの身に行き詰り、次に「懺悔の生活」下座行の真似をいたしました。秋になつても頭の下らぬ白穂の身をもて余し、何処にもよるべを失つて、自らの愚さと冷たさを悲歎しておりました時、

『弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず』の一句に驚喜し、

『いずれの行にても生死をはなることあるべからざるをわれみたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のため』

と聞かされて、ついのよるべをそこに知らされました。煩惱熾盛、罪悪深重の身、永劫かけて浮ぶ瀬のない者を、仏かねてしろしめし、ことに憐れむとの大悲の御声に、迷い子が、親の声をきき、親に抱かれて、親の家に帰らせて頂く浄土の旅がひらかれました。

耳を立つればなつかしや、あなたごなたに木隠れて、

られました。

日本にも戦前と戦後二回来られました。私も幸に名古屋の公会堂で女史の講話を聞きましたが、私の心に深く刻まれた言葉は、

「首で、啞で、啞の私には、外からの教師は不要です。

この私になくはならぬのは、今一人の私です。それは私の先生、サリバン先生であります云々」

の一句でありました。外からの教師とは、私共の外に立つて、あれこれと指導する教師です。然し二重、三重苦をもつ身には、それでは駄目なので、今一人の私でなくてはならないのです。今一人の私とは、生涯をかけて、目になり、耳になり、口になつて下さる人のことです。それは私の先生であり、今一人の私と呼ぶほかない人です。

さて私は御縁に催されて、法蔵菩薩の四十八願を一つ一つ信味させて頂くにつけて、法蔵菩薩は、智目、行足を欠く私に、「濁世末代の目足」となつて下さる方、私に無くてはならぬ今一人の私になりきつて下さる方だなあ！と驚喜せしめられますと共に、ケラー女史のこの一句が思い浮んでまいります。

近角常観先生は二十九才の時、大疑團におち懊悩の末に「仏は大慈悲のかたまりであった」とお気づきになると共

に「我は最大の良友、同心」一体の親友を得た」と告白して
いられますが、まことに尊いお味わいであります。

生死はてしのない大海は愚痴無明の大夜に、煩惱の業風
が吹きすさび、恩愛のきずなに引きずられながら、あてど
なくさすらい続ける三界孤独の身に、寄りそうて離れたま
わぬ今一人の私、私の仏がまします、その御名は
『ナムアマミダブツ』

(昭和四一年七月十日)

(註) 以上二篇は、岡山の愛生園内の真宗同朋会発行の「白道」
誌に寄せたものであります。全国十一ヶ所の療養所へ慈光誌を
お送りいたしておりますので、本誌に再掲いたしました。愛生
園の同朋会員は四百五十五人居られ、婦人会や報恩の集いや聞
法会を開いて熱心に求道していられます。痼疾の私はお伺い出
来ませんので今回会員の方々の懇念によりまして「声のたよ
り」のテープを頂きました。なお全国の療養所にも夫々有縁の
方々によつて信仰の集いが催されて居りますことも附記いたし
ます。現在は医学も進みハンセン氏病も治癒の曙光が射し療養
所の空気も明るくなられましたことを心からおよろこび申しま
す。

人のくり言ならぬ、今昔感です。

さてこの雑文を書く目的は何だったっけ、そうだ、ぜひ
とも読者の皆様にくかくお詫びを申しあげなければ……
じつは、とあらたまつて申すことは……慈光第十八巻
第五号(昭和四十一年五月十五日発行)に拙稿「親鸞聖人
と私」をのせていただきました。このような立派な信仰誌
に、私ごときものの草した雑文が加わることは恐縮至極で
あるとともに、個人としてはとても光榮に存じておる次第
です。

ところがあの文は、その実、私が書いたものではありません、
せん、前の中外日報の記者、中村権子さんのインタビュ
ーの記事なんです。そしてこれは真宗大谷派御本山から発
行されている「同朋新聞」第九六号(昭和四十年十一月一
日)の巻頭にのせられたものでした。うっかりものの私は
それを一度だに読み返すこともなく、放置しておいたので
す。花田さんは快く本誌に転載して下さいました。この記
事はベテラン記者の取材ですから私が書いた以上によくで
きていますと今になって思考されます。ただ一ヶ所、どうし
ても伏しておわびしなければならぬ部分を除いて。それ
は池山先生の御臨終の時には、家内が最後まで……とある
なかで「まで」を「に」に訂正しなければならぬひとこ
とです。友子夫人の御手記にも、十一月八日に参上したこ

慈光誌の皆さん、お変わりありませんか、お伺い致しま
す。私も愛読者の一人として皆様と何が目には見えないえ
にしの糸でつながっているようにも思います。大部分の方
はまだ一面識もございませんし、今後もうとうていお会いで
きない方々であるうかと存じます。それでも花田さんを通
じて仏縁にあらうことができまことを大変ありがたく、な
つかしく感じているもの一人です。

私はすでに還暦をすぎ、年令の斜陽族に入り、余命ばか
りを数える身分と相なりました昨今、若者たちとはちがっ
たおセンチになることもあります。年に一度、榊原徳草さ
んがお世話下さる浄住寺の一道会を池山先生の御導きと
うれしく喜ばしく思っております。そのくせ、やれ何とか、
かんとかと、欲情やら俗事やらにかまけて、めったにお参
りもできませんけれど……徳草さんには相すまん——と心
中ではあやまりながらも。

その昔、あの頃は花田さんも青春期でした。そのきびに
付して私たちも大声で念仏をばくばつさせていたものでは
京都学生親鸞会の草創のころ、それでも世間ではよく「お
若いのに感心ですな」といわれた。そしてそれでいゝ気にな
っていたのはむしろこっけいなくらいでした。これは老

とになっています。また呼子鳥のなかで御夫人の日誌を御
覧になれば、いつかふたつながら私が主治医のような立場
におかされていたようです。御臨終の日、とうてい私ごと
き俗医の手には早や届かない御容態だと感じたので、御夫
人やほかのお医者様方とも相談して、当時、全国的に有名
だった京大医学部内科教授、辻寛治博士の特診を仰いだの
でした。そして、それから御診察をおえて御夫人も私たち
も辻先生を玄関まで見送りに出て参りました。その間わず
かに数分、後に残ったのは家内だけでしたが、私たちが御
病室内に急いで帰りますと、先生には御いたわしくも従容
たる御臨終でございました。合掌。

それまで私の家内は海山のような御厚意や御訓育にはあ
ずかりましたが、お世話などしたことはございませんでし
た、ここに謹んでふかく御詫び訂正させていただきますと
存じます。

それから同誌にのりました拙歌もつぎのように訂正いた
したいと重ねてお願い致します。

つき当り 行き当りしてつまずきし

壁は見えずも 光寂けき

(一九六六年六月十二日記)



あとがき

朝顔のはかなきことを夕べには
忘れて明日の花をまちけり

豪 朝 律 師

酷暑御見舞申し上げます。青い空と灼熱
の太陽を見る毎に想い出されますのが、原
爆の惨事であります。

父をかえせ！母をかえせ！と切々と訴え
る詩句もあたらしく胸を打ちます。世界の
隅々までこの願いが伝わって二度とこの惨
事を繰り返さぬよう願つてやみません。

さて本月は近角常音先生の御忌月で、先
生の御法話の数々を繰り返し拝読して居り
ます。幸に今回は近角真観様の原稿を頂き
よい記念となりました。

千葉崇憲様は毎月酒見忠勢先生の御命日
に求道会の集いを続けていられ、その二十
五回目の集いの際のプリントから原稿を頂
きました。これからも法味を頒けて頂きた
いと念願しております。

佐藤強三郎様の堂の鈴はこれで終つてお
ります。今頃は宝林壇上から慈眼をそい
で下さることであります。念仏裡にた
だに謝しております。

七月八日に山口市の松村繁雄様が奥さん
御同伴でお来庵、一期一会の感しきりのう
ちに談合数刻、お別れを惜しまました。桃林
和山なきあと、法悦社関係の方々と月々の
座談会を催していられます。

実というはカナラズモノノミトナルと聖
人のお訓みになりましたが、真実の教はそ
こに永遠なものが輝いて、時の流れに消さ
れず、国境のへだてにさまざまたげられぬ、常
に生き生きとしたいのちを与えられます。
聖徳太子は「いずれの世、いずれの人かこ
の法を尊ばざらん」と憲章二条に示されま
した。千三百年の歴史をとおして太子の慈
訓が日本国民にどんなにか力と光を恵まれ
ましたことか、更に今後もまた。
人生五十年 百年は夢のようにすぎて行
きますが、このたまゆらのいのちにおい
て、永遠なるひかりといのちを味い得るこ
とは無上のよろこびであり、これあつて
か、あせらずもかかず、一日一日うむこと
のない歩みを落着いてさせて頂けるのであ
ります。

お 案 内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、
一道会例会。

市電、新郊通り二丁目下車、
東へ三筋目左入る。

○毎月二十四日、午前午後、昭和区小桜町
教西寺法話会。

市電、御器所通り下車、桜花学園の東。

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫

電話 八二一局 七〇三七番

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷

本 田 政 雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

振替口座名古屋一〇四七〇番